

季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM
QUARTERLY

URL <http://www.general-museum.fks.ed.jp>

71

冬の收藏資料品展
相馬・阿弥陀寺の宝物
冬の收藏資料品展
「明日」を見ていた昭和の記憶
ぼくのお父さんが子どもだった頃

福島県立博物館



銅造菩薩立像（善光寺式）

冬の収蔵資料品展 I 相馬・阿弥陀寺の宝物

阿弥陀寺は相馬郡鹿島町南屋形にある浄土宗の古刹で、いわき市専称寺を本寺とする名越派の相馬地方を代表する寺院である。『奥相志』に載せる縁起によれば、応永一三年（一四〇六）に岩松義政が行方郡千倉ノ庄（現在の鹿島町南部から原町市北部の地域）の領主となり、鎌倉より当地に下向するが、後に義政は病により隠居し、当地に方三間の堂を建て阿弥陀三尊を安置したところより始まる。この三尊は、義政が鎌倉より持ってきたお守りの仏像であった。さらに阿弥陀堂の寺務を統括する寺院を建立する。すなわち阿弥陀寺で、鹿島村中目（現鹿島町）より浄土宗の学僧源尊上人を招いて別当とした。

正長元年（一四二八）に岩松氏は滅亡する。以来、岩松氏ゆかりの遺品は、阿弥陀寺に伝えられることになる。

当寺の創建時の安置仏である阿弥陀三尊は銅造で、信州（長野県）善光寺の三尊を模倣した像で、「程見の阿弥陀如来」と称し、秘仏であった。立っている像で中尊の高さが一尺五寸という。現在、阿弥陀寺には像高が四二・五cmの銅造の如来立像が伝えられている。手指のかたちが、善光寺式阿弥陀如来のものとは異なり、両手は後の修理により補われたものとも考えられ、大きさからみるならば程見の阿弥陀如来と称されている秘仏の可能性が高い。さらに善光寺式阿弥陀如来の脇侍菩薩の一体も伝えられており、両像とも鎌倉時代の造立と考えられる。

重文の刺繍阿弥陀名号掛幅は精緻な鎌倉時代の工芸品として著名である。県重文の刺繍阿弥陀三尊来迎掛幅は現在修理中で、今回は展示できない。県

一連の板木は質、量ともに県内を代表する遺品で、県重文に指定されているものだけでも一枚ある。いずれも中世に溯る制作で、当地方の中世の信土宗の信仰を知ることができる貴重な遺品である。

収蔵資料品展開連行事のお知らせ

収蔵資料品展展示解説会

「相馬・阿弥陀寺の宝物」

講師 当館学芸課長 若林 繁

日時 二月二日（日）午後二時三〇分～三時

収蔵資料品展《相馬・阿弥陀寺の宝物》は平成一五年二月一六日（火）から平成一六年一月二五日（日）まで開催しています。観覧料 常設展観覧料でご覧いただけます。

相馬・阿弥陀寺の宝物

冬の収蔵資料品展

会期 平成15年12月16日(火)~平成16年1月25日(日)



刺繍阿弥陀名号掛幅（鎌倉時代）重文



法然上人像板木（鎌倉時代）県重文

冬の収蔵資料品展Ⅱ

「明日」を見ていた昭和の記憶

— ぼくのお父さんが子供だった頃 —

昨今、昭和30年代が注目をあびています。昔懐かしい食玩や駄菓子ばかりでなく飲み物の容器までも復刻され、出版物やテレビの企画でもさかんです。いま何故、あの頃を振りかえろうとしているのでしょうか。昭和30年代を生きた人々にとっては「懐かしい」思いがあり、その「懐かしい」という思いが持つ不思議なチカラに魅せられているのかもしれない。また、その時代を知らない若い人や子どもたちにとっては古いモノが逆に新しいモノとして映るのでしょうか。

あの時代、人々は「今日よりも明日」の豊かな生活をめざして暮らしの中にひとつひとつ新しいものを取り入れようと努力した時代でした。テレビをはじめ様々な家電製品が生活の中に入り、家族の暮らしのありかたも大きく変わりました。福島県においても戦後から残存する住宅難の解消と高度成長にともなう都市部への労働人口集中による住宅需要に対応するために住宅が建設され、核家族を中心とした新しいスタイルの生活が営まれるようになりました。今回の展示会では昭和30年代から40年代の暮らしに関連した資料を展示します。今ではほとんど姿を消してしまった炭の生活用品や懐かしいかたちの家電製品など日常の暮らしの中にあつた品々をご覧になって下さい。

人々が「豊かな暮らし」をめざしたあのころの記憶は、日々の生活の中にあつたモノやセピア色のワンシーンによって鮮明に蘇らすことができます。ご覧いただく皆様には、ご自身の「暮らしの記憶」を呼び覚ます鍵として、展示資料を観覧していただき、この展示を通してひとりひとりの生活史をふりかえるきっかけになればと思います。

収蔵資料品展開連行事のお知らせ

歴史講座

「昭和のあそび・くらし」(実技) 要申込

講師 当館学芸員 南雲 修

日時 三月七日(日) 午後一時三〇分〜三時

収蔵資料品展《「明日」を見ていた昭和の記憶》は平成一六年二月七日(土)から三月二二日(日)まで開催しています。観覧料 常設展観覧料で観覧いただけます。

「明日」を見ていた昭和の記憶 ぼくのお父さんが子供だった頃

会期 平成16年2月7日(土)~3月21日(日)



カタカタと縁側で(昭和30年代)



暮らしの品々

講演要旨 企画展記念講演会・企画展記念公演

平成一五年一〇月二日(日)
平成一五年一二月二日(日)

「笑いの人類学と民族学」 「笑いのパフォーマンス&トーク」

対談「笑いのダイナミズム」

講師 東京学東洋文化研究所 松井 健さん
マイム 演者 里見のぞみさん
自派村の八田内七福神踊り 演者 八田内七福神保存会の皆さん
対談者 星野 共さん・赤坂 憲雄館長

企画展記念講演会

「笑いの人類学と民族学」

秋の企画展「笑いの想像力 笑わせるヒトと笑うモノの博物誌」を記念し、一〇月二日に東京大学東洋文化研究所教授の松井健先生を講師に招き、講演をお願いしました。講演内容は左記のとおりです。

笑いを展示することは、難しいことです。人類学・民族学で考えることもあまりありません。企画展「笑いの想像力」は、笑いを正面から扱った企画展といえます。笑いは、人間の生活では非常に大切であり、研究蓄積のないテーマです。笑いをどう考えたらよいかということについてお話しします。

笑いの起源を、恩師の伊谷純一郎先生の「野生の二ホンザルの音声伝達」から、サルから人間への進化と照合して、笑いの進化についてみます。サルにとり人間のよくな笑い顔は、威嚇的・防衛的な行動で、泣きつ面のよくな表情が笑いです。次に人間の笑いについて考えると、笑いは複雑な現象、二重性、生理的なもの、作画的・協調的な二つの側面を持つています。ベルクソンの「笑い おかしさの意味についての試論」は、笑いなどのようにして起こるのか、丁寧に解説したもので



講演する松井健教授

調的な二つの側面を持つています。ベルクソンの「笑い おかしさの意味についての試論」は、笑いなどのようにして起こるのか、丁寧に解説したもので

す。身体と精神、連続と非連続的、物質と精神、自然界と人間界、これらのバランスが一瞬にして失ったとき、笑いが生まれるといえます。これが笑いの起源です。また笑いは、仲間意識に基づいて生まれます。みんなで笑う、笑いあうということですが、

松井氏は、このように人間の笑いの起源を、サルの音声伝達と比較しつつ述べ、次に笑いが各民族により違うことを、具体的な事例をあげて解説されました。笑いの始源としての文化化について講演され、本企画展「笑いの想像力」の原点についてわかりやすく解説されました。

企画展記念公演

「笑いのパフォーマンス&トーク」

秋の企画展「笑いの想像力 笑わせるヒトと笑うモノの博物誌」を記念し、一二月二日に里見のぞみさんによる「マイム」と、安達郡白沢村八田内七福神保存会の皆さんによる「白沢村八田内七福神踊り(ひよつとこ踊り)」の公演が行われました。次いで、「笑いのダイナミズム パフォーマンスと民俗芸能」と題し、福島大学経済学部教授でありパフォーマンス・フェスタ主宰の星野共さんと赤坂憲雄館長による対談が



マイムを演じる里見のぞみさん

行われました。その内容は左記の通りです。

一二月二日は秋晴れとなり、博物館玄関前の広場で、里見のぞみさんによる「マイム」が午後一時半より、多くの観衆を前にして演じられました。里見さんの全身を使っての道化的なマイムに、観衆は笑いの渦に巻き込まれてしまいました。音声は一切なく、身体の動きのみで人を笑わせるという、まさに「笑わせるヒト」であり、観衆は「笑わされたヒト」でした。

次いで企画展示室で、八田内七福神保存会の皆さんによる「七福神踊り(ひよつとこ踊り)」が、「岡崎」と呼ばれる道化の二人により演じられました。岡崎二人による稲作・養蚕の豊作を祝う踊りが滑稽に舞われ、観衆を笑いの世界に取り込みました。

引き続き講堂で、星野共さんと赤坂館長による対談「笑いのダイナミズム パフォーマンスと民俗芸能」が行われました。星野さんのパフォーマンスと笑いについて口火を切っていたが、赤坂館長の民俗芸能と笑いについての対談が開催されました。流調な掛け合いが進み、笑わせるヒトの立場から里見さん、七福神保存会の皆さんを交えながら、パフォーマンスと民俗芸能について対談が展開されました。対談者のお二人、笑わせるヒトの立場、そして聴講者を取り込んだ笑いの渦には、まさに「笑いのダイナミズム」が感じられました。



対談する星野共さん(右)と赤坂館長(左)



「七福神踊り(ひよつとこ踊り)」を演じる「八田内七福神保存会」の皆さん

笹山原遺跡群 旧石器時代の生活痕跡

藤原妃敏 考古担当

猪苗代湖西岸に位置する会津若松市笹山原遺跡群は県内を代表する旧石器時代の遺跡が密集する地域として注目を集めています。現在まで、笹山原A遺跡、8遺跡、

7遺跡、10遺跡、12遺跡などで資料が確認されています。一般に旧石器時代の石器群は一定の範囲にまとまって出土し、これらはブロックなどと呼ばれ、研究の単位となっています。笹山原遺跡の石器群のまとまりの内容をみると共通する特徴があることがわかります。

まず、石器製作技術をみると縦長の剥片(石刃)を連続して剥離する石刃技法が認められます。剥がされた石刃を材料として基部に刃潰し(プランテイング)を加えたナイフ形石器が特徴的にみられます。一方、小形の剥片の一端に刃潰しを施すさまざまな台形様石器が確認されています。石斧の出土例も多く、部分的に磨かれています。ものもありません。

笹山原遺跡群では今から約二四、〇〇〇年前に鹿児島県始良カルテラの爆発で降り積もった始良火山灰(AT)が発見されています。多くの石器群はATの下位から検出されていることから、これらは後期旧石器時代前半期に残されたものと考えられています。不思議なことに笹山原遺跡群ではこれらに続く後期旧石器時代後半期の石器群がほとんど発見されていません。ふたたび人間活動が活発となるのは旧石器時代終末期の細石刃を主体とする時期のことと考えられています。この地域では以前から細石刃関連の遺物として小石ヶ浜遺跡の石器群が知られていましたが、近年27遺跡で細石刃、細石刃核など豊富な資料が採集されています。

用いられる石材には大きく2種類のものがあります。

一つは質の良い頁岩で会津周辺には良好な原産地のないとされています。他方は白味を帯びた凝灰質頁岩とよばれる地元の石材と考えられるものです。頁岩を用いる石器にはナイフ形石器や石刃など製品が多いのに対し、凝灰質頁岩のものには石核や剥片が多く、接合関係が多く認められるという特徴があります。頁岩はおそらく山形方面などから搬入されたものと考えられ、これらの良質な石材が不足すると地元の凝灰質頁岩を使用したものとも想定できます。

さて、笹山原遺跡群で旧石器時代の人々が生活していた時代の環境を考えてみます。一般に旧石器時代は氷河時代と呼ばれる時期に相当し、旧石器時代の人々は相対的に現在よりも寒冷な厳しい環境を生き抜いてきたといえるでしょう。この時期は寒い時期(氷期)と暖かい時期(間氷期)が繰り返した時代とされています。笹山原で旧石器時代人が生活を始めた時期は最後の寒い時期(ウルム氷期)にあたります。約二〇、〇〇〇年前の最も寒い時期には年平均気温が今よりも5度、7度低かったですと考えられており、会津若松市の気温は現在の北海道東北部とほぼ同じであったと想定されます。気温が低くなる極地や高地に水分が氷となって残り、海に戻らないため海水面が低下します。最も寒い時期には海水面は100〜140mも下がったと考えられています。このことは日本海側の降雪量と大きな関わりがあります。海水面



笹山原 8遺跡出土石器(後期旧石器時代前半)

が低下し、朝鮮海峡が狭くなると対馬海流が日本海に流入しなくなり、現在よりも日本海が冷えて季節風に水分が供給されにくくなります。このような原因から氷期の降雪量は現在の半分以下であったとされています。

それでは旧石器時代人の生活はどのようなものだったのでしょうか。遺跡を発掘しても石器がまとまって発見されるだけで、住居や墓などの構築物の痕跡はほとんど確認されていません。そのため生活の具体像に迫るには難しい面もありますが、現在、石器の消費という観点から研究が進められています。その研究によれば、遺跡内で母岩(一個の石器を製作するための石)のすべてが使い切られておらず、その消費量は約4分の1程度と推定されています。つまり、一つの石の4分の1を消費した後に、別の場所に移っていると考えられるわけです。このことはかなり頻繁に移動する生活を示唆しており、移動する大形の動物群(ナウマン象やオオツノジカなど)を追って移動生活を送るハンターの様子が浮かび上がります。

笹山原遺跡群で遺跡が密集することと動物の移動ルートには大きな関わりがあるのかもしれませんが、また、猪苗代湖の水や食料資源との関わりにも興味を引かれます。猪苗代湖周辺では氷期の環境が比較的明らかになっている地域でもあります。今後、笹山原遺跡群の石器群の研究と環境適応の実態を総合的に考察できる地域として、さまざまな視点から研究を進める必要があります。



笹山原 27遺跡採集石器(後期旧石器時代終末期)

Q：檜枝岐歌舞伎など地芝居のことは知っていますが、福島県内には人形芝居もあったのでしょうか。

A：はい、確かにありました。江戸時代から人形芝居が上演されていたようです。

Q：どんな特徴があるのですか。

A：福島県内の人形芝居の特徴としてまずあげられるのが、三人遣いの北限である、ということとです。三人遣いの人形とは、現在皆さんがよく知っている文楽の人形芝居のように、一体の人形を三人で動かす方法のことです。それも、郡山市田村町の「上行合人形」、郡山市日和田の「高倉人形」、須賀川市仁井田の「関下人形」、安達町米沢の「川原田人形」、というように限定された地域にあったということです。

福島の人形芝居

第二は、これらの三人遣いの人形が、いずれも茨城県の水戸にあった大薩摩座という操り人形芝居の一座と関係する伝承を持っていることです。現在最も名が知れた「文楽」は、単に大阪で残った一座の名が、上演していた人形芝居を代表する名になったことに由来するわけで、大薩摩座の方が古いともいえるのです。

次に一人遣いの人形についてです。喜多方市岩月町入田付の「ふくさ人形」、西会津町宝坂字屋敷の「人形芝居」、田島町針生の「でこ芝居」、只見町寄岩の「でこまわし」がありました。いずれも会津地域に限られています。このうち、「ふくさ人形」は上演の記録や記憶がなく、明治以降に人形や道具が伝来したのではと推測されています。



最も大切にされていた三番雙

一人遣いの人形は少人数で上演ができるという特性もっています。上にあげた人形芝居のうち、西会津町屋敷の人形芝居は秋田の猿倉人形芝居を習ったということ

Q & A

榎 回答者
民俗担当
陽介

がわかっていきます。また、最近会津坂下町にお住まいの
お年寄りが、「近所の木賃宿のおじいさんが人形をもつて動かしてくれた」と教えてくださったことから考えると、まだ知られていない一座、もしくは人形道具があるのかもしれない。

Q：文楽に似ている「上行合人形」についておしえてください。

A：この人形は福島県指定の有形民俗文化財で、一体を除いて現在県立博物館に寄託されています。郡山市田村町上行合の佐藤俊輔さん宅に伝わっているもので、今から八〇年以上前の大正のはじめころまで上演されていたが、ながらく途絶え、現在ではほんのわずかの伝承しか残されていません。この人形については「水戸の太

田の縫左衛門という名人が上行合の人々に伝授した」と伝えられ、茨城県水戸市にあった大薩摩座、座元縫殿左衛門がもたらしたものだということが推測されます。安政四年（一八五七）銘の墨書がある、衣装を挟む板の存在などから、江戸時代終わりには確実に上演されていたことがわかります。毎年旧暦の七月七日が虫干しの日と決まっていた、その日に広げた人形や衣装を見に、多くの人が訪れたのだといわれています。また、この日は共有の竹を売ったお金で、朝まで酒を飲んだのだということとです。一方、女性は浄瑠璃を熱心に稽古したのだそうです。こうした共同の目的をもった上行合の村人は、礼儀作法が身について、当時はやっていた博打にも手を出さないなど、他の村とは異なる雰囲気があったのだそうです。

Q：人形はどうやって見ることが出来ますか。

A：実際の上演はもう見ることができませんが、人形は平成一四年の二月に公開しました。しかし、剥離がみられるなど状態が悪いので、常時展示することはできませんが、機会を作ってご披露するつもりですので、ご期待ください。



女性の人形の表情はなかなか美しい

トピックス

やさしい展示解説会

展示室の随所に立つている職員 展示解説員に気づかれる方は多いと思います。しかし、実際に解説している場面に遭ったり、解説を受けたり、という経験のある方は、もしかしたら少ないかもしれません。展示物について聞いてみたいことはあるけれど、声に出して尋ねても良いものか…。静かな展示室の中で観覧者の側から質問をするのは、なかなか勇氣のいるものだ、というご意見もあるでしょう。

そこで、毎週日曜日に開催されている『やさしい展示解説会』に参加されてはいかがでしょう。

もっと気軽に、多くの方に展示物に親しんでいただくこと、この春から始まったのが、展示解説員による『やさしい展示解説会』。これまで約半年のあいだ開催した中では、「展示の意図を改めて理解することができた」「歴史という共通の話題を楽しめた」など、好評をいただいています。

常設展総合展示室を、一時間ほどご案内しています。「原始」から「近現代」「自然と人間」のコーナーまで通して展示解説を行っています。部分的に聞ければ良いのだけれどという方も、気兼ねなく途中参加していただければと思います。解説でふれることができなかった展示物についての質問もご自由にとつぞ。また、小さいお子さんのご参加も大歓迎です。わかりやすい言葉でご説明します。

休日のひとつとき、歴史にふれるお手伝いができれば幸いです。どうぞご利用ください。

なお、各展示室担当の展示解説員は、ご観覧の皆さんからの質問に随時お答えできます。お気軽にお声掛けください。

(展示解説員 佐藤亜希子)



解説会の様子

春の企画展予告

戊辰戦争といま

会津にとつての戊辰戦争は、市内外から注目的です。そのため、歴史研究の対象としてだけではなく、小説やマンガにも数多く取り上げられました。これは、戊辰戦争の具体的な知識を共有する者の増加には寄与したと言えましょう。反面、多くの出版物のなかには過度な脚色を施したものも現れ、客観的な事実が不明確になってきてはいないでしょうか。本企画展の第一の目的は、会津を越えて当県内における戊辰戦争とは、どのようなものであったのかをできる限り正確に描き出していくことにあります。

また、近代の会津にとつての戊辰戦争は、敗者に付随する苦難の道りや観光資源として大きな影響力を持つていました。その結果として、当地域で生きる人々のアイデンティティー形成にまで影響を及ぼしたと言つことができるでしょう。本企画展の第二の目的として、近代・現代の会津と戊辰戦争との関わりを、時間を追つて描き出していきたいと思ひます。



錦絵「官軍勝利会津落城」(当館蔵)

春の企画展《戊辰戦争といま》は平成二六年四月一七日(土)から六月一三日(日)まで

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「祈りと願い」

会期 二月二日(火)から一月二五日(日)まで

「定信サロン 松平定信と周辺の人々」

会期 二月三日(火)から三月二八日(日)まで

講演・講座

美術講座

「福島の仙像³⁴」

講師 当館学芸課長 若林 繁

日時 一月二七日(土)午後一時半～三時

「暮らしの中の美術⁷」

講師 当館学芸員 川延安直・小林めぐみ

日時 二月二一日(水)水祝(午後一時半～三時)

「暮らしの中の美術⁸」

講師 当館学芸員 川延安直・小林めぐみ

日時 三月一〇日(水)午後一時半～三時

総合講座

「シリーズ若松城を歩く⁸」

鶴ヶ城と稲荷信仰

講師 当館学芸員 佐々木長生

日時 一月二五(日)午後一時半～三時

民俗講座

「シリーズ衣の民俗¹ 福島の衣と生活」

講師 当館学芸員 佐々木長生

日時 二月一日(日)午後一時半～三時

「シリーズ衣の民俗² 裁縫の民俗」

講師 当館学芸員 榎 陽介

日時 二月八日(日)午後一時半～三時

「シリーズ衣の民俗³ 衣の南と北」

講師 当館学芸員 佐治 靖

日時 二月一五日(日)午後一時半～三時

「シリーズ衣の民俗⁴ 衣の近代化」

講師 当館学芸員 猪巻 恵

日時 二月二二日(日)午後一時半～三時

体験講座

「わらそうりをつくろう」(実技)要申込

講師 技術伝承者 鈴木幸雄さん

日時 二月七日(土)午前一〇時～午後三時

「おもちゃをつくろう」(実技)要申込

講師 当館展示解説員

日時 三月一三日(土)午後一時半～三時半

歴史講座

「昭和のおそび・くらし」(実技)要申込

講師 当館学芸員 南雲 修

日時 三月七日(日)午後一時半～三時

やさしい展示解説会

* 展示解説員による常設展の案内です。六〇分程度。

一月 一一日(日)・一八日(日)・二五日(日)

二月 一日(日)・八日(日)・一五日(日)・二二日(日)・二九日(日)

三月 七日(日)・一四日(日)・二一日(日)・二八日(日)

* 毎週日曜日午前一〇時半からです。

* 行事等の詳細につきましては、博物館「ニュース」やホームページをご覧ください。

常設展無料開放日

* 小・中学生、高校生は、いつでも常設展が無料です。ただし、引率者は事前(一週間前)の減免申請が必要です。

一～三月の休館日

年末年始 十二月二八日(日)～一月五日(月)
 一月 一三日(火)・一九日(月)・二六日(月)

二月 二日(月)・九日(月)・二二日(木)

一六日(月)・二三日(月)

三月 一日(月)・八日(月)・一五日(月)・二二日(月)・二九日(月)